

平成 29 年度プロジェクト研究実績報告書

【研究課題】	地域と情報大のヒト・モノ・コトを記憶する Web サイト「ちば Active!」の開発・運用
【研究代表者】	河野 義広（東京情報大学・助教）
【研究分担者】	

【研究報告及び成果の公表等】

本プロジェクトでは、地域活動や研究成果を記録するための Web サイト「ちば Active!」を開発・運用し、地域の活動記録を随時発信した（図 1）。主として取り組んだ地域活動は、以下の 2 点である。

- (1) 四街道市を中心とした「こどものまち」の企画・運営
- (2) 千葉市若葉区での「こどものまち」の参加

学生達は、地域の小学生達が主体で行うまちづくりプロジェクト「こどものまち」に参加し、子ども達のサポートをしながら、地域の大人達と協力して活動を進めた（図 2、3）。こどものまちでは、子ども達が考えたお店、市役所や警察などの行政機関の仕事を体験し、働くことやお金の流れを知ることが目的である。

四街道市でのこどものまち開催は、平成 29 年度が 2 年目であり、四街道市吉岡小学校に加え、千葉市千城台東小学校の小学生達と合同で開催した。企画の段階からゼミの主体的に参加し、チラシの作成や各種企画、地域住民との関係構築、吉岡小学校や千城台東小学校の児童の企画サポートや事前準備、当日の運営に至るまで、全行程にゼミの学生が関わった。



図 1. ちば Active!の Web サイト



図 1. こどものまちの様子 1



図 2. こどものまちの様子 2

ゼミで開発した「お仕事タイムカードシステム」は、お仕事センター（子ども達が働きたい仕事を選ぶハローワークのような場所）と銀行の機能をシステム化し、子ども達自身がタブレット端末で操作できるよう設計したものである（図 4）。当日はタブレット端末を 3 台用意し、お仕事の記録と給料の支払いを簡略化し、監督者である学生の負担軽減に努めた。



図 3. お仕事タイムカードシステムの画面

学生達は、夏休みの本番に向けて、子ども達と一緒に企画を考えたり、お店の作り方を教えたり、たまにふざけている子がいれば叱ったりして、子ども達との関係を築いていく。当日までの様子を写真や映像で記録し、こどものまち特設 Web サイト（図 5）を作成した。同様に、動画制作や Facebook での発信など、地域活動の取り組みを学生達が積極的に発信した。



図 4. 四街道こどものまち Web サイト

地域活動において、地域の大人達との打ち合わせや子ども達との交流、準備や各種制作に関する計画と作業など、実際の活動内容とその強度（どの程度活動したか）を記録し、それらの活動が学生の主体性や実行力、コミュニケーション力などの成長度にどの程度影響があるかを調査した。具体的には、活動内容と成長度を記録するためのルーブリックを作成し、定期的に計測した（活動内容は週 1、成長度は月 1 の頻度で計測）。学生の成長度を評価するルーブリックの一部を表 1 に示す。表 1 のルーブリックを定期的に計測しながら、学生の活動内容とその強度も合わせて記録し、統計的な分析を行った。その結果、子どもとより多く接した学生ほど子ども目線に立って考えることができ、主体的に作業に取り組んだ学生ほど自身の役割を理解して計画的に行動できたという傾向が見られた。一方で、以前から子どもと関わることに慣れてきた学生は、子どもとの接し方や導き方という点ではあまり成長が見られなかった。このような学生に対しては、子どもと関わるだけでなく導き手としての役割も与えることで、地域活動の内容と成長度の関連性を明らかにできると考える。地域活動と学生の教育に関する調査を継続し、より詳細な分析を重ねることで、効果的な地域活動への関わりと学生の教育効果を両立できる活動プログラムを構築できると考える。

表 1. 学生の成長度を評価するルーブリック（一部）

	模範学生	理解者	要努力
子ども目線に立てたか	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取って行動できる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取ることができる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取るにはまだ努力が必要である
計画	自身の役割を理解し、自ら計画を立案し目標とする状態まで計画を進めることができる	与えられた計画を、目標とする状態まで進めることができる	自身の役割を理解し、計画を進めるためにはまだ努力が必要である